

都市及び地域環境の安全性・快適性に関する研究（その2）

Study on the safety and comfort of city and community environments (Part 2)

「まちにおける視覚障害者の歩行情報の認知に関する研究（公園編）」

- Study on how seeing-impaired persons recognize walking information in the community(in parks)-

生島一明
Kazuaki Ikushima

Abstract :

We have conducted a basic survey from the fiscal year 1997 to the fiscal year 1998 in our "Study on How Seeing-Impaired Persons Recognize Walking Information in the Community." In doing so, we have processed the realities of walking information for seeing-impaired persons and the basic concept for providing such information.

During our study, it was pointed out that seeing-impaired persons found parks and other wide-open areas difficult spaces to use when alone. This year, we researched how the parks are currently being maintained so that we can better understand the issues we need to consider to make recreation areas more friendly for the seeing impaired.

1. はじめに

「まちにおける視覚障害者の歩行情報の認知に関する研究」については、平成9年度から10年度にかけて基礎調査を実施し、視覚障害者の歩行情報の実態や情報提供の基本的考え方について整理を行った。

この中で、視覚障害者にとって単独で利用が困難な空間として「公園」等の広場的な空間が指摘されたが、今年度は、「公園」の整備実態を把握し、レクリエーション空間における視覚障害者への配慮事項について考察を行った。

2. 歩行情報の少ない「広場的な空間」

平成9年度に考察したように、視覚障害者にとって単独歩行が苦手な場所は、公園等の広場的な空間である。

このような場所は、動線が不規則に発生することやたまりの空間としての性格を有するなど、特定の動きを規定しない。

また、まちの中では、空間の構造そのものが、基本的な歩行情報の基盤となっており、その上でさまざまなまちの要素が補助的に認識されるが、このような広場的な空間は、壁等の構造体が少なく、その空間が自らを規定する空間情報を有していない。

このように、視覚障害者にとって「広場的な空間」は、空間そのものが構造としての情報を有していないため、その中に、点字ブロック等のハードの補助的な歩行情報を付加しても有効に活用できるものとはならない。

さらに、広い公園等では、迷ったときに周囲にたずねる人がいない場合が多く、このようなことから、公園は、視覚障害者にとって一人では行けない苦手な空間となっている。

ここでは、視覚障害者に配慮した公園の整備とはなにかについて、整備事例を通して検証する。

整備事例（特別整備系）

紹介する公園は、視覚障害者向けの特別なゾーンや特別な設備を導入するなど、視覚障害者が「一人」

で公園を利用できるようにするためのハード整備が追求されている。

■ K 緑地公園

- 広大な緑地公園の一角に、「視覚障害者コーナー」を設置
- 視覚障害者コーナーは、林や池の中に散策コースを整備した自然なエリアである。
- 視覚障害者への配慮については、スタート地点の触地図案内板、園路交差部のガイドパイプ、ガイドパイプ端部の点字ブロックである。

『触地図案内板の効果』

視覚障害者の中で点字を読める人は1割弱（平成8年身体障害者・児実態調査/厚生省）といわれている。

さらに、触地図については、浮き出し線などから地図を読みとることは容易なことではない。たとえ可能であるとしても長時間、地図を相手に奮闘することが必要となる。このような努力の結果、得られる情報としては、各施設の大まかな位置関係程度であり、触地図案内板の情報によって単独歩行が出来るものではない。

むしろ、触地図案内板の情報は、現地で必要な情報というよりは、現地に出かける前の事前情報として入手したい情報であるといえる。



林の中の散策コース

『「視覚障害者コーナー」の発想』

視覚障害者コーナーとは「視覚障害者が利用できる」コーナーであり、他のエリアは視覚障害者が利用できないエリアであると理解できる。

「視覚障害者が利用できる」とは、誰の助けを借りなくても一人で利用できるという発想が根底にあり、視覚障害者コーナーとは、視覚障害者が一人で利用することができるように整備を行ったゾーンであるということができる。

このような自然系の空間では、視覚障害者の単独利用を支援するハード整備には限界があることは前述したとおりであり、視覚障害者コーナーの発想は目の見える世界からの発想にすぎない。本来、誰もが公園のすべてのエリアを利用できるはずである。視覚障害者も、すべてのゾーンを同伴者と一緒に楽しむことができる。



スタート地点の触地図案内板



緑地公園の中の視覚障害者コーナー



散策路交差部のガイドパイプと点字ブロック

■ R 公園

- 音声ガイドシステムを導入
- 公園内の一部に視覚障害者を誘導するコースを設定し、突起情報としての誘導パイプをコース上に埋め込んでいる。
- コース上のいくつかのポイントで、公園事務所で借り受けた携帯用レコーダーのボタンを押せば音声案内が聞ける。

『誰のためのシステム？』

熟達した歩行技術をもった視覚障害者であっても、初めての来園では単独歩行は難しいため、同伴者の案内が必要となる。

当公園を始めて訪れ、職員の案内を受けた視覚障害者（全盲）は、『音声ガイドシステムは一つのアイデアであるが無機質である。せっかく同伴者がいるのだから人的対応が一番望ましいし自然である。』とのコメントを残している。

また、繰り返し訪れることにより、メンタルマップを創りあげた人は、すでに音声ガイドを聞く必要がない。

このような意味から音声ガイドシステムは現実には利用されないシステムであるといえる。

『自然な対応へ』

コース上に埋め込んだパイプは、色のコントラストはほとんど効かないため、全盲者向けの突起情報と考えてよい。先ほどの視覚障害者はさらに、『土の盛り上がりで突起が認識できないところもある。このような繊細な情報よりも土と芝生等の大ざっぱな質感の違いで経路を認知できる方法を考えるべきではないか』ともコメントしている。

本来的にハード系の誘導で限界のある公園整備においては、人的対応のしくみを導入しつつ、より自然な整備の中で大まかな「場」の情報を提供するように心がけることが有効である。



携帯用レコーダー



音声案内が聞けるポイントと誘導パイプ



視覚障害者誘導コースを設定



土の盛り上がりで認知しにくい誘導パイプ

整備事例（ユニバーサル系）

ユニバーサル系の事例の特徴は、視覚障害者への配慮について、ハード整備に固執することなく、公園本来の「楽しむ」という環境を創りあげるためにより自然な形で対応しようとしていることにある。

■ ○ 緑地

- 緑地内の一角に「五感で楽しむ公園（ヒーリングガーデン）」を設置
- コンパクトなヒーリングガーデンは、シンプルな動線をレイズドベッドの腰壁で明快な移動空間を構成するとともに、五感で「楽しむ」というテーマを設定している。
- ヒーリングガーデンは、視覚障害者や車いす使用者等の当事者参加によるワークショップ方式で整備を行った。

『公園ボランティアの養成』

ゆるやかなカーブの園路が各所で交差する広大な緑地空間の中では、視覚障害者の単独歩行は無理と言える。晴眼者であっても、各ポイントに設けられた案内地図で位置確認を行いながらも迷うケースが多々ある。

このような空間の中では、ハード整備での誘導は困難であり、人的案内を前提に考えることが現実的である。ここでは、ヒーリングガーデナー養成講座を開催し、公園ボランティアの養成を行っている。

なお、コンパクトなヒーリングガーデンの中では、慣れれば単独歩行が可能となるように整備を行っているが、公園ボランティアと共に園芸作業を行うなどヒーリングガーデンを楽しむという機会を提供しようとしている。

しかし「視覚障害者配慮イコール点字ブロック」という世間の点字ブロック信仰は根強く、やむなく点字ブロックを設置した。



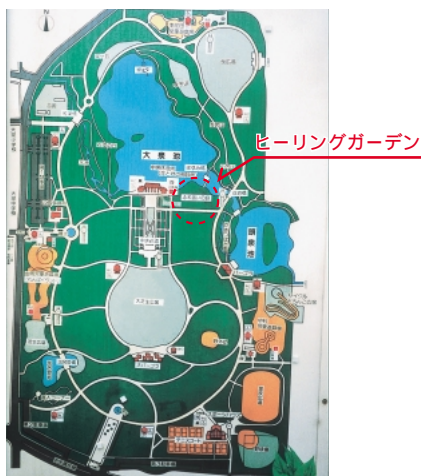
ヒーリングガーデン



レイズドベッドの腰壁で構成した移動空間

『福祉の象徴としての点字ブロック』

視覚障害者の参加によるワークショップで創りあげたヒーリングガーデンは、点字ブロック以外の明快な歩行情報（レイズドベッドの腰壁で構成した明快な移動空間）をデザインしたため、当初、点字ブロックは不要であった。



緑地公園の中のヒーリングガーデン



後から設置された点字ブロック

■ A 公園

- バラをテーマとしたコンパクトな公園
- 高低差のある地形を活かして、車いすで移動できるようスロープを軸に階段を組み合わせて整備を行っている。
- 手すり壁の高さは、車いすの視点、子供の視点から周囲が見渡せるように低く押さえており、転落防止のため厚みのある構造を採用。
- 点字ブロックは敷設されていない。外周園路の縁石や散策通路の腰壁が情報となり得る。

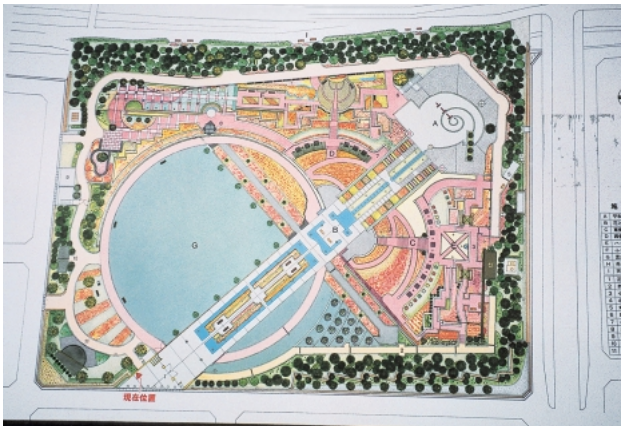
『さりげないきめ細かな配慮』

バラは、多くの種類があり1年を通して楽しめる。また、種類によって異なる微妙な香りや、葉形や葉肉の触感の違いなど視覚障害者にとっては、楽しめる植物であるという。

晴眼者は、視覚を中心にものごとをとらえているため、このような視覚以外のバラの情報を知らないことが多い。この公園はバラを通して、五感で感じることができる機会をすべての人に提供している。

また、外周園路に接する緑地からは高木の木々のざわめきが聞こえ、その園路ぞいには直接手で触れることができる自然な植生を配している。普段気にもとめない知覚環境を身近に感じることができる。

特別なバリアフリー整備ではなく、多様な利用者が「楽しめる」という視点から無理のないきめ細かな配慮が見られる。



バラをテーマとした公園



外周園路



高低差を生かした整備



スロープと使いやすい手すり

■ N 公園

- 陸上競技場等のスポーツ施設や植物園からなる広域公園
- 園内を1周する約2.4Kmのジョギングコースを整備
- 視覚障害者への配慮は、ジョギングコース沿いの歩道上に敷かれた点字ブロックと植物園内の点字ブロックである。

『散歩の会』

視覚障害者にとって、散歩をする場所、すなわち、安全で安心して歩ける空間、しかも歩きごたえのある場所は身近にはない。

この公園には、毎月1回、近隣の市町から20名程度の視覚障害者が集まり、散歩の会をつくっている。ここにすれば、友達とたのしく散歩ができる。散歩のコースは、ジョギングコースを利用する。

散歩の会は、歩行訓練士がコーディネートしており、午前の散歩のあとは植物園で昼食を広げ、喫茶店で休憩し夕方解散する。昼食の段取りや植物園の案内は人的支援が必要である。会は10年以上続いており、100回を超える参加経験者もあり、口こみで仲間が広がっている。

『単純で明快な情報』

参加者は、ジョギングコース沿いの歩道を歩かない。歩道上に敷かれた点字ブロックは途中でいくつか分岐しているため迷いこむ。また、マウンドアップした歩道部は、ジョギングコースの縁石ほど明確な情報がなく、歩道上には、ベンチや植樹、ごみ箱等があって歩きにくい。植物園に敷かれた点字ブロックも、あちこち分岐しているため使えないものになっている。

ジョギングコースは、単独歩行ができる条件がたまたま整っている。コースは閉じたワンウェイルートであり、起点となるスポーツセンター付近には、噴水があり、位置の特定が容易である。ジョギングコースは、マウンドアップした歩道の縁石で明確に区分されており、コースを認知しやすい。

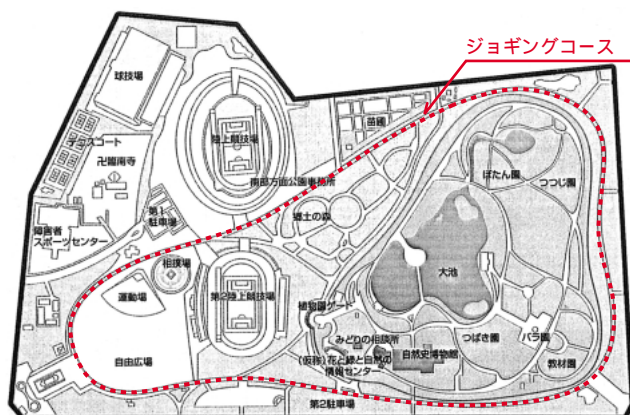
公園等の空間では、空間構造的なごく単純で明快な情報が有効であり、厳密な点字ブロックの分岐誘導等に対応できるものではない。なお、この公園で単独歩行できる空間はこのジョギングコースに限られ、他のエリアは人的支援が必要となる。



集合場所のサインとなる噴水



歩道より歩きやすいジョギングコース



園内のジョギングコース



歩道上の分岐する点字ブロック

3. レクリエーション活動支援のしくみ

視覚障害者は、歩行技術を身につけていても、初めての場所では単独歩行が難しい。

このため、日常生活の中で、視覚障害者がいつでも、どこへでもでかけられる環境をつくるためには、初めての場所で人的支援を得ることが出来る「しくみ」が必要となる。

現在、視覚障害者の外出支援のしくみとしては、行政のガイドヘルパー制度があるが、レクリエーション目的には適用されない。

実生活上の多岐に渡るレクリエーションニーズには、従来の行政的な制度ではなく、当事者が主体的に選択できる柔軟な支援のしくみが求められる。

その一つとして、全国のボランティア団体のネットワーク組織として「全国視覚障害者外出支援連絡会」が活動を開始している。

< 全国視覚障害者外出支援連絡会 >

全国視覚障害者外出支援連絡会は、生活に必要な事柄というより生活の質を一段高めるためにボランティアが関わっていくべきであるとの考えのもとに、全国のボランティア団体のネットワークを通して視覚障害者の行動の自由をサポートすることを目的に1996年に設立された。

『利用方法』



『利用状況』

利用目的は、観光を中心に、会議出席、プロ野球観戦、パラグライダー体験、コンサート等の催し物参加、葬儀出席等さまざまである。

* 活動例

月/日	利用者住所	利用目的・活動内容 経路（メンバーの自宅→待ち合わせ場所→目的地）
4/23 (木)	八尾市	カラオケ 豊中市→近鉄 高安→近鉄 山本
22 (木)	大阪市 鶴見区	万博公園へ散策に 門真市→地下鉄 京橋→吹田市
5/3 (金)	広島県	大阪観光（法善寺など） 堺市→大阪市→天王寺
12 (木)	カナダ	空港からホテルへの送り 吹田市→関西空港→ホテル（関西空港内）
6/2 (木)	神戸市 垂水区	買物 神戸市→神戸市
14 (金)	—	網膜色素変成症患者の会総会の手伝い 神戸市・大阪市・高槻市→神戸市 (6名)
7/25 (土)	大阪市 中央区	通院（透析） 堺市→大阪市
29 (木)	高知県	プロ野球観戦 大阪市→J R大阪→阪神 甲子園
8/21 (金)	—	駅からホテルへの送り 神戸市・宝塚市・大阪市→JR新大阪・JR大阪→JR日根野 (3名)
27 (木)	大阪市 鶴見区	パラグライダー体験 神戸市→大阪市→兵庫県氷上郡
9/18 (金)	大阪市 淀川区	スパワールド（温泉）へ 西宮市→J R大阪→地下鉄 恵美須町
26 (土)	大阪市 北区	入院中の家族の見舞い 富田林市→大阪市

『当事者が育てる「しくみ」』

支援するネットワークの立場は、視覚障害者の自立性を前提にしておき、必要な支援のみを行うこととしている。支援の内容も、随伴ボランティアではなく、各ポイントで乗り継ぎボランティアやガイドボランティアの組み合わせを原則とし、極力、鉄道事業者や施設管理者等の現地関係者への支援を当事者から働きかけることを勧めている。

当事者がサービスを受けるという立場ではなく、自らが主体的にネットワークに働きかけて、必要な支援を組み立てていくという立場にたっている。

このため、当事者が必要とすれば利用は増え、制度は充実する。いわゆる当事者の主体性が制度を育て、ネットワークを広げていくことにつながる。

4. 視覚障害者支援の発想を変える

視覚障害者への支援には場所の特性に応じて多様な方法が考えられるが、いかに精緻な機器や設備を導入したとしても、人的援助にまさるものはない。

公園等のレクリエーション空間における視覚障害者への支援は、従来の単独歩行（利用）を支援する

ハード整備の発想ではなく、共に楽しむという発想にたって、自然の要素や様々な人々との関係を育む機会を共有していくプロセスが重要となる。

このような視点から、公園等のレクリエーション空間における視覚障害者支援の基本的な方向について考察を行った。

『オリエンテーションの難しさ』

視覚障害者にとって、まず必要なことは、「オリエンテーション（定位と方向性）」であり、移動することはその後の問題である。

視覚障害者の歩行支援の現状は、「自分の位置を知る」すなわち自分の位置を何で定位できるかを考える前に、いきなり点字ブロックという手段が用いられる。

公園等のただっぴろい空間は、視覚障害者にとっては空間情報が極めて少ないため、オリエンテーションが非常に難しい空間である。

『ハード整備の限界を知る』

公園の中で点字ブロックをたよりに緊張しながら移動し、点字情報から公園の概要を知ることによってはたして公園を楽しむことができるか。

「公園の中までも点字ブロックで拘束されたくない」といった当事者の声も聞く。

従来、視覚障害者の単独歩行ばかりに気をとられて、本来的にハード系で誘導の限界のある公園整備においても、ハード整備を中心に行ってきた。

このたびのユニバーサル系の整備事例の取り組みからもわかるように、ハード整備の限界を認識し、人的対応を組み合わせながら、視覚障害者が「楽しめる」空間とは、そして、様々な人が「楽しめる」空間とは、どのようなものを追求していく姿勢が求められる。

『楽しみ方を支援する』

公園の楽しみとは、臨場感のある風景をコミュニケーションしていくことにより、自然の音や風、香り、子供の歓声など、景色の状況を感じとることでもある。晴眼者の発想で無機質なハード整備を実施しても、利用されないものが多々ある現状を直視し、人的対応を組み込みながら「公園の楽しみ方」をプログラムすることが視覚障害者にとって何よりも有効な支援であることを再認識することが必要である。

視覚障害者への情報提供を、従来の「歩行情報」や「生活情報」の領域から「楽しむ情報」の領域へと広げていくことが、視覚障害者の世界を晴眼者の世界に近づけ、今まで希薄であった共有体験を積み

上げていくことができる。

『協働でプログラムを運営する』

さまざまな人が楽しめるプログラムづくりには、多様な主体の参画が欠かせない。

公園の楽しみ方としても、用意された「楽しみ」方だけでなく、自らが参加し、創造する「楽しみ」方も検討されるべきである。

視覚障害者が公園を利用するという立場から、さらに一歩進めて、障害者も地域の一員として公園のプログラムづくりに参加し、運営していくなど、地域の公園づくりに関わっていくことが求められる。

協働で地域の公園づくりを行うことは、あらゆる人と触れ合うことであり、地域社会のバリアを解消していくための地域のコミュニティの庭としての役割も期待される。